

大谷學會公開講演要旨

業について

本學教授 舟橋 一哉氏

佛教における業の問題は、阿含や大乘諸經論よりも、むしろ部派佛教の阿毘達磨論書において、より精密に論究がなされてゐる。今は、説一切有部の所説を中心として、その他二三の部派の所説を簡単に紹介し、その所説が、阿含に散説されてゐる根本佛教の業説から見ても、果して正しいかどうか、といふ點について考へて見たい。差當つて問題の範圍を次の二つに限定する。(A)業と思(意志)との間の關係。(B)業の餘勢に關する問題。

(A) 阿含經典や律典の所述を検討すると、業は、身・語・意の三業のうち、常に意業を中心として考へられてゐる。すなはち、根本佛教では、外面に表はれた身・語の動作よりも、内に在つて、その身語の動作を動作せしめる心のはたらき(即ち意志作用)こそを、業として最も本質的なものと見てゐたことになる。これは佛教が動機論であると言はれる所以であつて、この點で身業を重んじて結果論に陥つてゐる所の耆那教の業論と比較して顯著な對照を示してゐる。このことは部派佛教になると、「業の體を何處に求めるか」といふ問題として展開される。これは、ものを割り切つて考へないと満足しない阿毘達磨佛教の性格に基くものであるが、これによつて佛教の業論の發

達を促した點もあるが、しかし又一方において佛教本來の業論が著しく歪曲せられた點も見落すことは出来ない。それで、セイロン上座部・經量部などの諸派では、いづれも、契經の記述に據つて、業を思(意志)なりと定義する内面的な解釋を採つて、佛教の本流を受けついでゐるが、しかし有部の説は必ずしもさうではない。即ち有部では、意業の體は思であるが、身・語業は思已業であつて、そのやうな表業の體は形色及び聲であるとする。これはすなはち、「有二種業、一者思業二者思已業」といふ契經に據つて、思業たる意業に對して、思已業としての身語二業を考へ、その思已業とはすなはち思業の所作であると解して、その體を外面的物質的に考へたのである。しかし、もとよりこれは有部獨特の所説であつて、正しくはむしろ經部の考へる所の如く、思已業も亦、審決思(思業)に對する動發思として、内面的に捉へて、その體を思と考へて行く方が、佛教の正統的な考へ方に合致するものであらう。そして、有部の上の如き考へ方と同じく、業の體を外面的物質的に捉へんとするものに、身表行動説を立てる正量部(犢子部)がある。また、成業論に出てゐる日出論者の説は、内面的な思が身語の表としてあらはれる爲に、その媒介として一種の別法を立てて、これを身語業とするものであつて、この考へ方は、有部のな考へ方と經部的なそれとの中間に立つものと言へるであらう。

(B) 業は意志の働きをも含めて廣い意味での「行爲」を意味する語であるが、單にそのやうな行爲、動作をいふのみならず、その行爲、動作をなした事によつて、有情の心中に、謂は

ば業の「餘勢」が残る、その業の餘勢をも含めて、ここに「業」の語が用ひられる。これは佛教以前の業論でも同様であつて、さうでなかつたならば、耆那教で言ふやうな「古業を滅する」といふことは、意味を爲さないことになる。阿含ではこのことは十二緣起説の上に表はれてゐる。即ち、無明に覆はれた識が外に向つて活動する所に行(業)が成り立ち、この業が却つて又識の内容を内容づけ、その内容に應じた苦樂を人は經驗しなくてはならない、といふことが十二緣起説の結論であるが、この「業による識の内容づけ」(即ち行↓識)といふことは業の餘勢が心に残るといふことである。「心は積聚の義」と言つて、經驗の蓄積が心(質多)であるとせられるのも、同じ意味である。阿毘達磨の業論においては、この様な業の餘勢が、様々な言葉によつて説かれる。大衆部のいふ増長、正量部のいふ不失壞、經部のいふ思の種子、有部の説く無表業などがそれである。ただ、増長・不失壞・思の種子などが、特に未來において業果を引くはたらきをなすもの、すなはち、業因と業果とを結びつける作用を特にもつものとして立てられてゐるのに對して、(このことは部派佛教において輪廻説を積極的に肯定した必然の結果である)、有部の無表業は、特に、その様な役目を荷つて登場したものとほされてゐない。それは單に善惡の業によつて心を内容づけて、妨害妨惡の一種の後天的性格(習性)を形づくる作用をなすにとどまる。有部の立場からすれば、三世に法は實有であるから、實有なる業が、異熟因として、過去の分位にあつて、異熟果を與果することによつて、業果は成就するから、無表業が、ことさらに、生果の功能をもたねばなら

ない必要がないからである。けれどもこれは何處までも有部といふ一部派の無表業説であつて、他の部派の説かぬ所であり、決して佛教本來のものではない。阿含において「業による心の内容づけ」とされたものが今の「無表業」であり、「心の内容に應じて感受する苦樂」とされたものが今の「果報」であるならば、無表業は佛教本來の立場からは、果報を引く力をもつたものとして特に立てられたものと見なくてはならない。成實論の無表業説はまさしくそのやうなものとして説かれてゐる。他の部派の説く増長などが果報を引く役目を特にもつものであるならば、この點からしても、有部の無表業説が特異な説であることは了解出来る。

ギリシヤ文化とギリシヤの自然

阪大教授 村田數之亮氏
文學博士

ギリシヤ文化は、何よりも先づ人間的であつたと考へられる。ギリシヤの藝術は人間中心のものであり、文學は人間性の展開であり、神話や宗教は神を擬人的に取扱ひ、哲學に於ても、ソクラテスやプラトンに見られる如く、人間が主なるテーマであつて、自然には興味を持つてゐない。ギリシヤ文化は、自然に對して無關心である。或は、反自然的であつたと一應は言へるであらう。しかし乍ら、果してギリシヤ人に於ては、自然はどうであつたのであらうか。

ギリシヤ文化のギリシヤ史や書物は、必ずギリシヤの自然に